文化施設あり方懇話会

令和４年度　亀岡市における文化施設のあり方を考える懇話会　議事要旨

日　時：令和４年１１月２２日（火）　午前１０時００分～１２時１０分 場　所：亀岡市役所３階　３０２、３０３会議室 出席者：今里佳奈子座長・川勝啓史副座長・中西裕樹委員・松井利夫委員・木曽布恭委員・河原林茂美委員・栗山初美委員・加藤美智惠委員・野原通夫委員・藤本邦雄委員・大矢寛恵委員・蔭山陽太アドバイザー・清水重敦アドバイザー・鵜飼均アドバイザー 欠席者：安藤眞吾アドバイザー、松井哲哉アドバイザー

＜委員・アドバイザー意見交換等＞

（栗山委員長／文化ホール小委員会の報告）
・小委員会では主に文化ホールの「機能」「規模」「立地」３つの視点から意見交換を行った。
・文化ホールの現状として「施設機能の不足により十分な活動ができない」「既存の施設では予約が取れない」などの課題が意見としてあった。
・既存の施設であるガレリアかめおかの活用状況のリサーチ、現状の課題分析を専門的に行うことと次世代の意見を取り入れた計画策定の必要性が意見としてあった。
・文化ホールの機能について、音楽ホールと演劇ホールの両機能を持つ、複合型の施設がいいのではないかという意見があった。
・市民発表だけでなく、プロの演奏や舞台を鑑賞できるホール機能や設備が必要であるという意見があった。
・プロの演奏会や演劇をするための施設には、設備経費がかかるため、亀岡市内だけでなく、周辺地域の文化施設やホールの活用も含めて柔軟に考える必要があるのではないかという意見があった。
・客席については、見やすさや長時間に渡って鑑賞することを考え、階段状にしたり、座り心地の良い客席にこだわることも必要だと意見があった。
・子育て世代がゆっくり鑑賞できる、キッズルームも必要だという意見があった。
・ミーティングや音楽演奏の練習の場として使える会議室兼スタジオルームを設け、小規模な発表もできる部屋が必要だという意見があった。
・文化ホールの規模については、600 席程度の客席数が適当ではという意見が多かった。第２回目の小委員会でも事例紹介があった養父市のホールと同程度ぐらいの規模が亀岡市には、ふさわしいのではという意見があった。
・ホールの規模が大きくなると、施設の使用料金が高くのではなるのではないかという意見があった。
・施設規模については、亀岡市の人口規模に応じた施設にするべきということで、今後亀岡市の人口減少も視野に入れて検討する必要があるという意見があった。

・立地については、ガレリアかめおかの芝生広場を文化ホールの建設候補の場所として充てるのはどうかという意見があった。そのほか、歴史的な文化景勝地など、亀岡らしい場所というのも一つ視野に入れてはどうかという意見があった。
・立地について、アクセス面や駐車場のことについても検討すべきという意見があった。
・新たな文化ホールを建設するには当初の建設費だけでなく、人件費や維持費、修繕費など多くのランニングコストがかかることも認識すべきという意見があった。
・今後どのようなまちづくりをしていくのかという視点や、他市にはない、亀岡ならではの文化施設という視点が必要だという意見があった。
・施設がないことで子どもたちが文化に触れる場所がないという課題に関しては、毎年１回は中学生などが演劇鑑賞を行うことを市の条例等で取り決めるなど、ソフト面で解決できることはすぐにでも実施して欲しいという意見があった。
・ガレリアかめおかの使い方や運用方法などについて分析し、結果を基に、どのような文化施設が必要なのかということについて検討をすべきとの意見があった。
・ガレリアかめおかは、施設の機能面や予約システムなど改善すべきところがあるので、既存施設の調査研究を進める必要があると意見があった。
・若者を交えた意見交換会や一緒に文化施設について考えていく場が必要だという意見があった。

（加藤委員長／文化資料館小委員会の報告）
・今回の小委員会では、既に作られた「亀岡市新資料館構想」から６年が経過していることを考えて、検討が必要なところについて重点的に意見交換をした。
・「亀岡市新資料館構想」は、博物館機能についてはしっかりまとめられている。
・空間の使い方を固定したものではなく、フレキシブルに使えるようにするという意見があった。
・新資料館構想になかったデジタルコンテンツの必要性についても意見があった。
・亀岡の豊かな自然は大事な項目なので、大学連携なども視野に入れて、歴史分野の中で取り上げていくことが必要だと意見があった。
・規模について、収蔵庫の大きさは、現在の 600 ㎡から約２倍の 1300 ㎡が必要、展示スペースとしては、現状の 280 ㎡から約 2．5 倍の 750 ㎡が必要との意見があった。実際の数字については、今後、展示計画などをさらに個別具体的に検討して、考慮する必要がある。
・駐車場に関して、大型バスも含めて駐車スペースの確保が重要である。
・亀岡祭の山鉾の展示には大きなスペースが必要だという意見があった。
・建物の立地については現在の場所は、亀岡市のハザードマップで水害の浸水想定区域になっているので、文化財を守ることができる場所の検討も必要と意見があった。
・文化ホールとの複合施設については、文化ホールと文化資料館は性格も異なるので、別々に考えた方が良いのではないかという意見があった。
・立地に関して、重要なこととして、亀岡市が城下町を残していくのかどうかという視点が必要という意見があった。

・市民に親しんでもらえる資料館を作るためには、市民と一緒に考えたり、資料館に愛称をつけてもらうことも必要だという意見があった。
・資料館の開館に関するルールとして、建物の工事が完了した後に通風乾燥期間というのが必要なので、少なくとも建設工事が完了してから、ふた夏を過ごさないといけないということなので、工事完了後も1年半は、準備も何もできないような状態があるということを考えたスケジュールの設定が必要である。
・運営形態について、学芸部門は直営であるべきということが意見として強調されていた。博物館を管理する部局を教育委員会部局とするか市長部局とするのかということ、官民連携の可能性についても今後検討が必要である。

＜意見交換会＞機能、規模、立地等について主に意見交換を行う

（Ａ委員）

文化ホールに関して、ガレリアかめおかの響ホールは、大きさ的にはちょうどいいとクラシック音楽をされている人から聞いている。しかし、響ホールは予約が取れないので施設を使うことを諦めていると聞いている。小委員会の報告にあった600席のホールの他に、響ホール程度の150から200席ぐらいの施設も必要ではないかと思った。それと響ホールをもう少し使いやすいよう音響などの改修もあわせて考えてみてはどうか。

（Ｂ委員）

クラシック音楽などの室内楽では、小さい形での施設で、150から200席ぐらいのスペースがいいと思う。響ホールはちょうどいい規模感であるが、客席から見て、舞台袖が丸見えになっていることが課題であると思う。ガレリアをもっと充実させるために響ホールを含め、他の部屋についても使いやすいように改善してみるのも必要ではないかとは思っている。

それ以外にも、今まで亀岡会館で発表会を行ってきた団体は、響ホールのような150席程度ではなくて、亀岡会館に近い規模のホールが必要だという意見も出されていた。また、自分たちの成果を発表する場だけではなく、プロの舞台芸術を市民が見られる施設として、音響や照明、舞台がそれなりの機能を有している600席程度ぐらいのホールが亀岡市には必要ではないかという意見があった。

亀岡文化交流協会の事業を大本本部のみろくホールを借りて開催したことがあって、そのホールは舞台発表するための施設ではないが、市民の方々からは、亀岡で伝統芸能を間近で見られて感激したという声も聞くことができたので、亀岡市内の施設設備を充実させるとともに、少し規模の大きなものということを希望している。

（Ｃ委員）

亀岡市の人口は確実に減っていき少子高齢化がさらに進んでいく中で、亀岡のまちづくりをどうするのかという視点で、文化施設についても考える必要があると思っている。

例えば、商売をやられている方は、まちがどのような賑わいを作っていくのかということが

気になると思うので、まちの賑わいづくりの中に文化施設をどのような形で、立地であるとか規模であるとか、それから運営や建築に係るコストがどのぐらいかかるかを考えなければいけない。文化ホールを建設するにあたっては、市民がある程度負担するような形で考える必要があるし、それを過大な負担にならないようどうするのかを考える必要があると思う。文化ホールの小委員会の中でも何度も意見が出たが、既存のガレリアかめおかをもっと上手く使っていく方法を先に考えてから、新しい文化ホールをどうするかを考えるべきだと思う。

ガレリアかめおかの芝生広場に600人前後の規模のホールを建てて、響ホールやコンベンションホールを含めた、全体の使い方について検討する必要もあると思う。

そして、ガレリアかめおかの敷地内に文化資料館も何らかの形で組み込んでいけるようにしていきたいと考えている。それが一気にできなければ、継続して取り組みながら最終的に複合施設にできればと思っている。あと駐車場の問題もあるがそれは別の機会に検討をしていきたい。

文化施設の立地については、できる限り効率的に移動できるように文化施設の周りに、商業施設であるとか、スポーツ施設であるとかそういったものが、効率的に配置されるようなまちづくりがいいのではないかと思っている。

色々と意見を言ったが、とにかく文化ホールを作ってくださいとだけ言っても、やはりなかなか建設に向けて動いていかないと思う。頭から文化ホールはいらないという市民の方もいるので、市民の中の議論で、これからの、10年、20年先のこのまちがどうであって欲しいとか、私たちの孫から次の世代がどのようなまちで育っていって欲しいのか、そういった発想が必要だと思う。

（Ｂ委員）

新しい施設は、文化ホールと資料館は一つの総合的な施設の中という意見がある一方で、文化ホールと文化資料館の複合施設となると、総面積が大きくなり、文化ホールと文化資料館では性格も違うので、別々に考えた方が良いのではないかという意見がある。複合的な施設の建設では広大な土地が必要になるので、そのような広大な土地が亀岡にあるのかという課題が見えてくる。そういう意味でも、私は文化ホールと文化資料館は個別に考えたほうがいいのではないかと思っている。もし広大な土地の取得が可能であれば、ガレリア周辺のぶどう畑や京都府の農林センター、JAなどあの辺で一つの大きなエリアにするのはどうかと思っている。

（Ｄ委員）

大前提として、その地域に様々な文化施設が身近にあるということが理想的だとは思っている。一方で、全国に2000ぐらいある公立文化ホールの場合、そのほとんどが運営に非常に苦しんでいる。設置から5年が過ぎると下降線をたどり、10年経つとその施設が無駄じゃないかと言われ始め、文化施設がそのまちの文化そのものの是非を問うような象徴になってしまい、そのまちにとって文化自体が邪魔じゃないのかみたいなことが言われている現状がある。

文化ホールの場合、施設建設後に運営がうまくいっていないところがほとんどなので、ハードとソフトについてじっくり検討を重ねる必要がある。

つまり、施設と文化政策が持続可能な関係をつくれているかどうかが非常に重要だと思っている。

そして、方向性とどういうものが必要かということが決まれば、その施設の設計については、割と簡単に決めることができるので、一定の方向性を決めることや施設と文化政策の持続可能な関係性をしっかり作るということを固めないと、将来的に施設が無駄と言われるようなことになってしまう。

また、費用に関しては、世界経済の動向にかなり影響をされることになるので、そのあたりも検討をすべきだと思う。

例えば、施設建築に関して言うと、この半年で建設費用は約 1.5 倍になっており、今のところこの建設費用が下がっていく傾向は見られないので、いま考えていることができなくなる可能性も費用面に関して大いにありうることだと考えられる。そう意味でも社会情勢の影響を受けるので、新しい施設の建設はなかなか難しいと思っている。

このような視点から考えても、新しい施設を建設するとなると周りを納得させる根拠が必要になるし、社会情勢の影響を受けても、施設が必要だという根拠を市民の中から、しっかりすくい上げて、それを表現するようなことが必要だと思っている。

これは後ろ向きに考えているのではなく、今後、施設について前向きに検討するためには、これらのことを考えないとすぐに後ろ向きな考えに陥ってしまう。

それから先ほど高齢化の話に関しては、鑑賞するという視点から考えたときに、実は意外とプラスにとらえられると思う。

高齢化になると、時間とある程度の余裕がある人が増えるということなので、施設に鑑賞に来る方が増えるということも考えられる。

（Ｂ委員）

建物を建設するハード面以外にソフト面として、鑑賞する側の文化度の向上が大事だと思う。高齢者の方は、文化ホールなどで音楽や舞台をよく鑑賞していると思うが、逆に今の若い中学生や高校生はそういう機会が少ないと思っている。例えば、今の亀岡にそういう施設がないのであれば、中学生や小学生に、そういった舞台が見られるところに、年に 1 回は舞台を見に行けるよう市から援助するとか、具体的な予算をつけることも重要ではないかと思う。ハコモノを作るだけじゃなく、市民の文化力をどのように高めていくのかを考える必要もあるのかと思う。

（Ｅ委員）

今後ガレリアを維持するには約 120 億円が必要という記事を読んで、費用がとてもかかると感じた。やはりガレリアといま検討している文化施設を並行しながら考えるのがいいのではな

いかと思っているし、ガレリアは大変使いにくく予約も取りづらいという課題があると思っている。

先ほど、室内楽で響ホールの話もあったと思うが、響ホールは音楽だけではなく、いろいろな催し物もすることがあるので、やはり音楽をするには専用のホールを検討する必要があると思っている。規模的には、複合の音楽、演劇もできるホールが必要であるということに合わせて、規模は600人ぐらいの客席があるホール、加えて、リハーサル室等も必要があると思う。立地については、やはり一つの文化村というものを形成していく場所も必要ではないかなと思うので、亀岡にはまだまだ大きな土地もあるし、そういうところに、私個人の意見だが、文化ホールと文化資料館を併用したものが一体化できたらいいのではと考えている。

（Ｆ委員）

文化施設を建設する場合、具体的に１人あたり１世帯あたりいくら税金の負担があるのかという話になったときに、本当にそんな施設が必要なのかという意見が周りには多いように思える。以前、市民にＬｉｎｅのアンケートをとったときも、今すぐ必要かという質問に対して、必要だという方はごく一部だけだった。私は早急に文化ホールを建てる必要もないと思っている。それは、この間、地元の町民文化祭があったときに、そこで子どもたちが学校で描いた絵や習い事で書いた習字など、いろいろな展示がされていた。

特別大きなホールや美術館で発表されていなくても、子どもたちの嬉しい姿や誇らしげにしている姿を見て、子どもの文化芸術に関する態度は割と育つのだと感じた。

学校でオーケストラを招いて演奏会をしていただいたときに、学校でそういった体験や経験をさせていただけることは親としてはとても嬉しいと感じた。親としては学校でやっていただけると時間もお金もかからないので、教育を通じて子どもたちに文化に触れる機会をたくさん増やしていただけるよう、ソフト面で考えられることを優先していくほうがいいのではと思っている。そして、その文化に触れる機会を得た子どもたちが、自ら税金を払ってでも、施設を建てたいという気持ちを養うほうがいいのではとも感じている。新しいものを建てるのではなく、今あるガレリアかめおかやみろくホールの他にも使えそうなお寺のお堂を使ったりするなど、またガレリアの設備の改修を先にすることがいいのではないかと思う。

（Ｇ委員）

美術大学の卒業生の実際の活動を見ていると、必ずしも素晴らしいホールで展示できたりしているわけではない。

まして、彼らにはお金もないし、新しいことをやればやるほど、自分の周りには観客がいないので、自分たちで集めていく必要がある。それが徐々に大きくなって10年ぐらい経ってようやく、ひとり立ちできていくというような、そういうプロセスを踏んでいる。

それぐらい自分たちの文化活動というのを広めていくには時間がかかるということであるが、今意見のあった、町民文化祭や市民文化祭のようなものが活性化していけばいいと思うし、自

分が子どもの時のことを考えてみると、新しいホールはなかったし、公民館とか教室、野外などでいろんな音楽や、芸術の活動に連れて行ってもらった記憶がある。地域では自治会は集会所を持っていたり、小学校、中学校、高校が体育館を持っているわけで、そういったものの活用を促進する文化政策が立ち上がって、そこに予算を投入すると何か建物を建てて維持していくお金に比べると費用を低く抑えることができるし、そういう調査をしてみる必要があると思う。

新しい施設を建設することを考えるよりも、既存のものを活用するための予算を、教育機関や自治会につけることも一つの案ではないかと思う。それらをした上で、どうしても広い施設が必要だということになれば、今ある施設のリノベーションが必要になってくるだろうと思う。運営の方法や運営組織も含めて、活用しやすいように改善していけばよいと思う。

（Ｄ委員）

例えば、600 人規模の中ホールと 200 人規模の小ホール、そして稽古場スタジオをそれぞれ作るのに 50 億円かかるとします。そこで中ホールをやめて、小ホールとスタジオだけに 20 億円をかけて建設することになると 30 億円差が出る。

単純に言うと、その 30 億円を文化政策のために回す。市民文化祭であるとか、あるいは鑑賞するために必要なお金を市が出すとかにすると 1 年に 1 億円かかったとしても 30 年使えることになる。また、5000 万だと 60 年使えることになる。

文化政策に 1 年間 5000 万円とか 1 億円が使えるようになれば、とても豊かな文化政策ができると思う。

建物を建ててしまうとそこでしかできないし、文化施設は絶対に利益を出すことはない。

そういう意味では、建物だけで考えていくと、実は文化政策は貧しくなるということも考えられる。本当に何度も言うが、文化政策と実際のハードはスタート時点で考えていないといけない。

全国の 2000 館のうちのほとんどが苦しい運営を強いられているということを前提に、せっかくこれから何か考えるということであれば、新しい方向性を持った亀岡市ならではの文化政策、それに必要なものは何かということを考えていった方がいいのではと思う。

（Ｈ委員）

この間、小学校の体育館でキッズダンスや中学校の吹奏楽、寸劇などをやると、そこに住民の方が 300 人ぐらい来られた。お金を使わなくても、今ある施設を使って町民の文化度を高めたり、住民交流を作り出すことができる。

一方、馬堀駅にはトロッコ亀岡駅があって、コロナ前は大体 120 万人ぐらいの観光客が見込まれていて、亀岡で一番多い観光入り込みのスポットだった。しかし、乗客から「亀岡には駅だけでなにもない」という話を聞いたことがある。

その 120 万人の乗客の半分以上は、馬堀から、嵯峨の方に折り返して帰っていって、嵯峨嵐

山でお金を落として帰るというのが現状である。
　私は観光の交流人口というのは、まちの資源だと思うので、今ある資源をうまく活用した立地で、文化施設、交流施設というのも考えるとまちの活性化に繋がるのではと思っている。

（Ｂ委員）
　新たな建物をすぐに建設するよりも今は、ガレリアを充実させることの方がハードルが低いと思うし、またハードに充てる予算をソフト面に充てて、直に文化に触れる機会を増やし、本当に文化施設が必要なんだという世代が増えていって欲しい。
　昨年、LINE アンケートを１回とっただけで、400 人ぐらいのアンケート結果が正しいのかという疑問を持っているので、調査やリサーチをもう少し具体的にできたらと思う。

（Ｉ委員）
　資料館は、話がまとまってきていると感じている。
　それに対して文化ホールの方は、建てる側と建てない側で、意見が二つに分かれているという印象を受けたので、私からも文化ホールについて意見を述べたい。まず、小委員会の議事録を見ても、亀岡らしさの議論が一切感じられなかった。
　これのなき議論は、私は意味がないと申し上げたい。
　そういう意味でも、文化ホールと文化資料館を複合的な施設にしたいという意見があったが、この議論がなされていなければ、複合施設にすべきではないと思うし、もしそれが議論できるのであれば、私は資料館とホールは、同時に考えるべきだと思っている。
　しかし、規模が大きくなると、逆に作りにくくなってくるということもあると感じている。
　資料館で意見が上がっていた木造建築については、無理することはないと本当は思っているが、今全国で木造の文化施設が立ち上がっている中で、なぜ木造を選ばないのかというのはむしろ不自然であるとは思う。それらも含めて、とにかく亀岡らしい、全国に誇れるようなものを作ると考えるべきだろうというふうに思っている。

（Ｊ委員）
　博物館としては、普段見えない収蔵庫は、展示室と同じか、それ以上の面積がハードとして必要だということを押さえておいてほしい。
　今後もおそらく地域社会が変わっていく中で、必ずこれまでこの亀岡で暮らしてきた人たちから出てきた遺産を誰が守っていくのかという議論になるとこれは公以外はありえないので、博物館の議論する際に収蔵庫は必ず動かせないということは確認をさせていただきたい。その上でソフト面やいろんな所を利用していただく仕掛けを議論していくということになっていくかと思うし、あとは展示室などの部屋を作っていくときも、今までの博物館の活動前提ではなくて、一応それを見直して何が必要なのかということは考えていく必要があるが、やはり収蔵

庫はしっかり押さえていただきたい。
　立地の話については、複合の場合、それだけの土地であったり、運営の手法ができるのかを考えると、正直苦しいのではと思っている。
　今の文化資料館は、立地的にもハザードマップで浸水域に建っているので、博物館学の観点からとらえると、少しでも早く建設を進めるべきだと思う。
　数年前に東日本豪雨があった時に、ある市の市民ミュージアムの収蔵庫が水没したということがあった。そこは、現在も復旧作業を進めていて、水が引くと何もなかったかのように都市機能は戻るが、その場所だけが、本当に大規模災害が起きたような状態が今でも続いている。これは亀岡では起きてはならないことだと思う。
　また、博物館施設として、文化資料館はおそらく建物として 50 年近い。あとしばらくというよりも、すぐにでも建設を急ぐべきだろうと思う。
　立地について、現在の博物館は観光資源とかなり意識されており、この場合には亀岡の城下町や明智光秀というコンテンツは外せないと思う。市民の方に使っていただくことは当然ベースにあるが、外部から来ていただいた方はおそらく街歩きや、ゆかりの場所を巡るフィールドワークをされるので、遺跡などが離れない場所にあった方が、人の滞在時間も長くなる。いろんなところを含めて、私は文化資料館の立地は城下町の一角がいいと思っている。

（Ａ委員）
　文化資料館は収蔵庫が危機的状態であって、地震があったらどんな被害が出るんだろうかと思っている。水害については、今いろいろなところの美術館などでも、1000 年に一度の災害に耐えるというような施設も増えてきている。文化資料館では、それぐらい大事なものを預かっているところという認識を持ってほしい。

（Ｆ委員）
　今言われたように、資料の保存については早急な対策が必要ということで、それは一致していたと思う。
　資料館の展示企画は地味なものが多く、それほど足を運びたいと思うものは少ないと感じる。また興味があっても、他の予定と重なりいけないこともあった。
　しかし、そういう展示を続けることに価値があると思うので、資料館自体は必ず必要だと思う。先ほどの文化ホールと同じで、子どもたちが常日頃、その資料と向き合う、触れる機会はもちろん大事なので、外観の話になるが、行ってみたいというような外観が必要じゃないかと思っている。
　私が子どもや家族と一緒に行くような場所は、勉強もできて、おいしいものもあるようなところであって、自分と関係があると思うところになる。まずは行くきっかけがあるような空間を作ってそこにニッチな資料館があればいいのではと思う。

（Ｂ委員）
資料館の機能としては、文化財の保管や博物館的な機能があるが、現状の資料館の機能について伺いたい。

（Ｋ委員）
資料館の機能は、亀岡の歴史を紹介している常設展とテーマ展として期間を決めてする企画展や特別展がある。
今の資料館は展示室が２つあって、常設展と企画展・特別展をしているが、特別展をその２部屋を使って開催した場合、常設展ができず、亀岡の歴史を知りたい市外の方などが来られた場合は、そのニーズに応えられない状況がある。
また常設展のみの開催でもう一つの展示室では写真や絵画などフレキシブルに色んな方に活用していただけるよう展示壁面ケースの前にボードを設置して色んな事ができるような設えにした。
今は収蔵庫が満杯であるが、社会課題の１つとして、檀家さんが少なくなってきている中、寺の仏像やお寺自体の運営もままならない状況、そこに収蔵されている資料などをどう維持していったらいいのかということがある。今後は資料館が保管できる機能も果たしていく役割を担っていくことになると思っている。
文化ホールと文化資料館の複合施設について、資料館の小委員会では文化ホールとの複合はなかなか厳しいという意見になっているが、その根本には加藤委員をはじめとする、文化資料館友の会の皆さんが今まで積み上げてきた新資料館建設に向けての提言書が、また１から同じような議論をスタートしていかないといけないというようなジレンマがあるからだと思う。収蔵庫の問題もあるのでなおさら早く新しい文化資料館を作ってほしいという気持ちが出ているのだと思う。文化ホールと複合施設としての建設をまた１から考えるとなるとさらに時間がかかってしまうという思いがあるのではないか。

（Ａ委員）
文化資料館は、少ない人数で幅広い範囲をカバーしている。資料館では、今まで「円山応挙展」や「廣瀬桑田展」など亀岡ゆかりの画家の展覧会もしている。亀岡祭の絵画についてもロビー展をした。他にはアユモドキの展示やさくら石の展示もあって、「きっかけ作り」のためのさまざまな努力をされている。
これから新しい施設を作っていく段階でインクルーシブデザインという新しい概念の中で、市民が色々なアイデアを出して関わっていくことが大切だと思う。

（Ｋ委員）
デジタルコンテンツを使いながら展示ということになるとまたそれなりの部屋などを作って

いく必要もあると思う。文化ホールとの複合が駄目だという話ではなく、よく文化資料館は敷居が高く入りづらいと言われるので、何かのついでに入ってもらえる施設にするには、単独の資料館ではなく、一つのエリアの中に資料館、博物館があって入りやすい雰囲気の中で、入館してもらえるような立地の中で、まちづくりの中の文化ゾーンを考えることも大事な視点であると思う。

（G委員）

文化資料と聞いたときに、例えば、かめおか霧の芸術祭では、現在生きている作家の作品展示がなされてはいるが、そういったものもあと10年、20年経っていくと、文化資料になっていく可能性があると思う。いわゆるこれは美術館の仕事というよりも、亀岡らしさということでいうと、亀岡で行われている市民の活動が一つの文化資料になっていくということであると思うし、その資料の保管の方法はデジタルコンテンツもあるし、実物の保存もあると思う。現在の、今まさに動いている文化をどのようにして保存していくのか、あるいはそれを広めていく機能は、文化資料館の中には必要だと思うので、先ほど、博物館機能と美術館機能という話があったが、亀岡は美術館がないと思う。私は美術館と博物館で分ける必要はないと思っているので、美術館は例えば現在、ここ近年行われている芸術文化活動、資料館はかつての考古資料であったり歴史的な資料を保管する場所で、これは時間的に繋がっているわけで、その一つの繋がりをどのように亀岡らしさとして表現するのかということを考えなければならない。いつまでも石田梅岩や出口王仁三郎それから明智光秀だけで、今後、1000年、2000年やっていけないので、新しい文化の担い手を歴史の中におさめていく必要があるのではと思っている。

（Ｊ委員）

博物館法の考え方は、美術館、博物館、動植物園すべて博物館扱いであるので、施設としては美術館、博物館として分ける必要はない。

ある博物館では、日本画や洋画の展覧会を美術館的にされていて、そこで入賞された作品は博物館資料として所蔵されている。大きな違いは、それぞれの専門の学芸員がいるのか、いないのか、というところによる。

（Ｌ委員）

文化資料館については、収蔵庫が危機的な状況ということで、それはそれで必要なんだろうなというように思う。

ただ、私どもが商売の中で事業をする時に、当然商売をする目的があって、その中でどういう形でやっていくのか、その先には何があるのかというビジョンを考え、そこからいろいろとコンセプトが生まれ、なぜこの事業は必要なのかということがわかる。

文化ホール小委員会の報告書に、文化ホールが亀岡のまちづくりにどのように貢献できるか

というビジョンを持つことが重要というふうに書かれているが、やはりそうやって、ビジョンから切り崩してくることで、文化施設が、このまちにとってなぜ必要なのかということが初めて生まれてくるのだと思う。

そこで、しっかりビジョンを示さないと、それぞれやはり違う考え方を示されるので、そういう部分は必要だと思う。

私、大変残念だと思ったことが、亀岡の総合計画を練られた時に、高校生のアンケート結果の中で「亀岡にずっと住み続けたい」と答えた方は、全体の約 7%から 8%の間だった。

やはりこの亀岡の文化であるとか、芸術であるとか、そういうものを子どもたちにしっかり伝えていくことが、この亀岡を愛することにも繋がってくると思うし、将来的にも、そういうことが必要だというように思っている。

高校では文化の時間を作っていただけると思うので、例えば、出張でこの亀岡の文化を伝える機会をつくる、そういうことをしていただくことも非常に大事だと思うし、市の条例などで演劇鑑賞を行うことを取り決めて、中学生などは文化ホールがなくても、ソフト面で解決することで文化、芸術を、このまちに広めていっていただくということが、非常に大事だと思う。